

特定非営利活動法人 CAN 2021 年度事業報告

1、基本方針と事業の総括

特定非営利活動法人 CAN では 2021 年度、組織的・財政的基盤の強化を図るため、札幌市の若年被害女性等支援事業をはじめとする補助金事業への参画を目指すとともに、これまでの実績を踏まえ、札幌市・北海道に社会的養護アフターケアの事業化を働きかけていくことを目標として掲げ、札幌市の「困難を抱える若年女性支援事業」に参画して 10 代後半から 20 代の若年女性への支援に取り組むとともに、社会的養護アフターケアの事業化に向けて関係機関との情報交換を行い、札幌市・北海道への働きかけに向けた準備を進めた。また、以下の事業に重点的に取り組んだ。

(1) 【居場所提供事業】【シェルター事業】【相談事業】【同行支援事業】【自立生活支援事業】

ピッケノハコを拠点として、①気軽に立ち寄り自由に過ごせる居場所の提供、②緊急的な一時避難所（シェルター）の提供、③個別の相談への対応、④個人を支える伴走型支援の実施、⑤交流活動を行った。来訪者数・相談件数が飛躍的に増加したのに伴い、病院同行、家事支援など居場所外での支援活動も増加した。開室時間帯には複数のスタッフを配置してこれに対応した。

居場所では原則として約束事を設定せず、それぞれの過ごし方で思い思いに利用してもらう中で利用者とスタッフとの関係が構築され、利用者の抱えている問題が少しずつ整理されたり、医療等専門的な支援に繋がったりといった手ごたえを感じる事ができた。「休眠預金活用新型コロナウイルス対応緊急支援助成」を活用して新たな居場所スペースを確保することができた。

(2) 【啓発事業】【アウトリーチ活動】

レター、SNS をはじめ様々なメディアを活用した情報発信、街歩き、ピッケノハコ以外の場所での相談活動や同行支援を行った。特に LINE 登録者数が増加し、CAN の活動についての認知が高まった。

(3) 【ネットワーク強化】

関連する活動を行っている他の民間団体や行政機関との連携を強化した。札幌市「困難を抱える若年女性支援事業」において居場所提供および自立支援を担当した。クラウドイ（札幌市の女性支援団体による緩やかな連合体）の「ほんの気持ちギフト」の取り組みに参加した。また、「カコタム」および「さっぽろ青少年女性活動協会」とともに里親ファミリーホームを訪問したり、措置解除前からの関係構築を目指す「からんこえ」の取り組みに参加した。

相談にとどまらず本人の希望に即した同行支援・家事支援など若年層の生活支援全般を手がける事業所はほとんどないことから地域での寄り添い支援を行う団体と相談・支援における協力体制を構築した。

社会的養護の望ましいアフターケアの在り方について、他事業所とともに札幌市児童相談所と情報交換を行い、札幌市によるアフターケアの構築過程にかかわることができた。

(4) 【スタッフ養成事業】【組織的・財政的基盤強化】

事業を安定的に実施できるよう、スタッフ研修、組織的・財政的基盤の強化に取り組んだ。非常勤スタッフ 1 名（2021 年 8 月）、常勤・非常勤スタッフ各 1 名（同年 10 月）を新規に雇用しスタッフの増員をはかったが、LINE 対応を含めた相談、アセスメントに関する専門的な研修の不足などスタッフのスキル向上が課題として残った。

ピッケノハコの運営財源を確保するのが困難であり、クラウドファンディングなどに取り組んだが、組織的・財政的基盤の強化は依然として喫緊の課題である。

2、事業の実施

利用者（ハコメン）に寄り添い、支えることが、人それぞれの多様なあり方として想定される「自立」

につながるとの理念を持ち、以下の事業を行った。

2－（1）10代から20代の子どもや若者に対する自立支援事業

表1 活動実績

	電話	メール	Line	来訪	訪問	同行*	イベント	フードバンク	年賀状	関係機関調整
2021年度実績	556 (149)	307 (80)	1054 (57)	687 (67)	33 (9)	92 (13)	11	18	18	114
2020年度実績	121 (14)	216 (14)	244 (13)	150 (17)	7 (2)	21 (7)	14		17	42

*同行は、病院同行、役所同行、自立支援のための住居内覧同行など
表中の数字は延べ数。()内が実数です。

① 居場所提供事業

ピッケノハコにおいて利用者と継続的な関係性を築き、話を十分に聞き取った。そのうえで、本人が考え、自分で選択した将来像の実現のために、先回りせず、寄り添いながら、その人なりの生活を築いていけるよう、必要な関係機関と連携しながら支援した。必要に応じて、同行自援、生活支援も行った。

なお、居場所の運営は以下のように行った。

【「ピッケノハコ」の設置と運営（居場所、相談、交流）】

- 無料で利用できる通所の居場所として運営した。
- 利用対象は、おおむね10代後半から20代の若者で、家族からの支援を受けられない／受けづらい方を主に想定した。
- 平日11:00～17:00、土日・祝日12:30～20:00に開室した。
- 開室時間帯は自由に入出入り可能としながら、個別相談などのための予約優先日を設定したものの、予約による占有的な利用はほとんどなかったため、後半からは予約優先日を廃止し、前日までの問い合わせに対応する形になった。
- 8月に一名、10月に二名新規にスタッフを採用したため、開室時に複数のスタッフで対応できるようになった。ボランティアの協力も得た。
- 備品（テレビ、タブレット、書籍等）、入浴設備、調理設備を利用者に提供した。
- 食事や軽食の提供、寄贈された食料品・衛生用品等の配布を行った。食品については、コメ、乾麺、菓子類等の食品を個人から随時寄贈していただいたほか、隔週でハンズハーベストより提供を受けた。
- クリスマス等の季節の行事を実施した。今年度は引き続き感染拡大の懸念もあったため、広く呼び掛けるイベントはクリスマス会だけとし、集まったハコメンとその都度餃子パーティをしたり、桜餅を作ったり、ボードゲームをしたり、スタッフ私物のプロジェクターを借りて映画上映会をするなど小さなイベントを随時行った。
- 居場所が学習の場として利用されることはあったが、体系的な学習支援には至らなかった。
- 近隣の地域住民や同様の活動をしている他の施設・機関と交流・協力関係を築くよう試みた。
- 北海道スタイルを参考に、感染症拡大防止に努めた。情勢に応じて時間あたりスタッフを含めた最大人数制限を行った。

【実施状況】

- ピッケノハコは、1月1日から3日までを除き毎日開設した。

【利用者の状況】

- 利用者の大半は 20 代女性だが、関係機関からの紹介により、不登校の小学生の日中の居場所としての利用、子育て中の女性の来訪などもあり、利用者の年代は 10 歳未満から 40 代までと幅広かった。
- 居住エリアは、徒歩圏内だけでなく、中央区、東区、西区、北区など札幌市内各所に広がっており、さらには近隣の市町村からの利用もあった。

表 2 2021 年度新規利用者の照会先

利用者	関係機関	SNS	リーフレット	メディア	その他
2	15	3	0	1	1

② シェルター事業

- ピッケノハコの一部を緊急的な一時避難場所（シェルター）として提供できる体制を整えた。また、そのために、シェルターの泊り勤務可能なスタッフを一名確保した。
- シェルター利用は 1~2 泊程度とし、6 件の利用があった。結果として、1 泊は 2 件、2 泊が 1 件、3 泊 1 件、4 泊 2 件だった。それ以上に長期の滞在が必要となったケースについては、協力機関（女のスペース・おん、北海道民泊観光協会、特定非営利活動法人レラピリカ）と連携した。
- 利用者が 18 歳未満の場合は、児童相談所に相談し、一時保護などの必要な措置を依頼した。
- シェルター利用に際しては、年齢にかかわらずスタッフが付き添った。
- 利用者の相談に応じ、生活の見通しを一緒に考えて就労や生活の支援を行い、シェルター利用後も関係機関に同行した。

【記録・検証】

- ピッケノハコ利用者への対応や支援の経過は記録に残し、逐次検討した。
- シェルター利用者への対応は、たとえ一泊であっても記録に残し、逐次検討した。
- 支援活動においては、CAN スタッフが守秘義務を順守することを説明するとともに、関係機関に対して個人情報の提供が必要な場合もあることを伝えた。

【実施状況】

表 3 シェルター利用実績

LiNK 事業	その他（他機関紹介→ハコメン）
5 名	1 名

【利用状況】

- LiNK の事業において CAN のシェルター利用は原則 1, 2 泊を想定していたが、週末であったり、次につなげる協力機関の居場所の状況によっては 3, 4 泊にずれ込むケースもあった。
- 協力機関シェルターの滞在期間も、その方の状況により 1 か月から数か月を要することがあり、安定した居住場所の提供の難しさを感じた。
- シェルター利用の際には必ずスタッフが夜間付き添うこととしているが、シェルター利用希望者は基本的にそれまで面識のない方であり、事前の面談と宿泊にあたるスタッフが限られ、負担が偏ってしまうこととなった。

③ 相談事業（表 1 の実績参照）

- 交通費がない、体力・気力が乏しいなどでピッケノハコへの来所が難しい場合に、希望の場所に向いて相談に応じた。
- 出張範囲は原則として札幌市を中心として、車または公共交通機関で半日で往復できる距離としたが、実際に出かけた場所は市内および隣市までだった。

④ 同行支援事業（表 1 の実績参照）

- 行政機関・他の支援機関・病院等への同行支援を行った。

⑤ 自立生活支援事業

- 相談者、またシェルター利用者のうち、その後の居住場所が定まらない利用者からは、本人の希望を聞き取り、安定した居住場所が得られるよう不動産業者の紹介、同行を行った。
- 生活費の確保のために必要な福祉施策の紹介や同行を行い、生活の安定を図った。
- LiNK 事業として自立支援事業を行った。（LiNK 事業の項参照）

⑥ アウトリーチ活動

【情報発信および電話・メール・SNS 等での相談】

- Twitter、Instagram を週に複数回更新し、ピッケノハコの存在、および電話・メール・LINE で相談活動を実施していることを広く周知した。Twitter を見てピッケノハコの存在を認知し、来所につながったケースもあった。
- ピッケノハコに足を運びやすくするために開室や来訪希望の状況を発信した。
- 電話・メール・LINE でも相談活動を行った。
- 週に一度程度、Twitter など SNS のほか、マッチングアプリなども検索して、ネット上で居場所を求めている方に対し声掛けを行い、相談機関の存在を知らせた。
- LINE は、なかなかハコに来所できない利用者や繋がるには便利なツールではあるが、状況のよくわからない中で、LINE だけでやり取りを続けることには難しさもあった。
- ピッケノハコに足を運ばなくても、電話やメール、SNS でつながり続けた。誕生日などのライフイベント時や、正月、クリスマスその他の季節行事には CAN から発信をして関係性の継続に努めた。
- 個人への支援には、相談の他、同行、食料品・衛生用品等の配布などを行った。

【街歩き】

- 8 月からは、札幌市の困難を抱えた若年女性支援事業の一環として、週に一度の SNS パトロールと、ほぼ月に一度のすすきの夜歩きをさっぽろ青少年女性活動協会、札幌市と共に行い、LiNK 事業の周知を図るとともに、心配な発信をしている方に対して DM を送った。
- すすきの夜歩きと SNS パトロールの DM 発信から支援につながったケースはなかった。支援につなげていくためのメソッドが課題である。

2-（2）ネットワーク強化

- 札幌若年女性支援ネットワーク「Cloudy」の活動に積極的に参画した。
- 若年女性支援や社会的養護アフターケアに必要な関係者会議に積極的に参画した。

表 4 実施状況

クラウドイキ ッチン	からんこえ	関係者会議	関係機関によるピッケノハコ 見学・訪問	関係機関見学・訪問
7	5	7	11	3

- ピッケノハコを媒介として、複数の機関と繋がっている方を連携して見守るケースが出てきたことによって、支援の幅が広がった。一方で、機関同士の援助観の相違が露呈することもあり、自分たちの援助観を絶対視することなく、利用者の抱える課題や置かれている状況に合わせて関係機関との連携を密にすることが課題である。
- 助成金事業により知り合った他県の団体の事業に協力し、取材を受けた。

2 - (3) 組織的・財政的基盤強化

① スタッフ研修事業

- スタッフが、支援やアフターケアに必要な社会的知識を獲得する機会を設けた。そのために、「アフターケア事業全国ネットワークえんじゅ」をはじめ、他団体主催の研修への参加を保障するとともに、理事を交え、スタッフ間での勉強会を行った。具体的には、新規スタッフ採用に伴い、10月より月1度程度のペースで、理事による研修を実施した。
- スタッフの研修派遣を行った。具体的には、えんじゅの研修に参加（2名）した。
- 随時、支援事例の検討を行い、支援スキルの見直しと向上を図った。
- スタッフミーティングにおいて月に一度SVを招き（10, 1, 2, 3月）、事例の検討を行った。
- その他、以下の催しに参加した。

*反貧困ネットオンライン学習会

*SNS 研修

*休眠預金助成事業の研修（6, 9, 11, 1, 3月）

*HSC 講演会

*にじいろ talk-talk 実績報告会

*困難な問題を抱える若年女性支援のためのセミナー

*子どもの虹専門職研修『喪失をめぐって』

② 調査研究

- これまでの支援を通じて培った若年女性支援のスキルを言語化する努力を継続し、可視化するよう試みた。
- 2016年に行ったシンポジウムの記録や、CAN設立からの経緯をまとめたブックレットを制作・発行し、CAN会員、寄付者、札幌市会議員、ピッケノハコ見学者などに配布した。

③ 啓発事業

【広報】

- 7月と12月にニューズレターを発行し、会員・寄付を下さった方々・各関係機関その他支援者に配布した。
- フェイスブックを通じて、ピッケノハコの利用状況を月次で発信した。
- ブックレットを作成し、配布した。
- ホームページを開設して、活動の様子をブログで周知した。
- 資金調達のためのクラウドファンディングを実施。活動を広く周知する機会にもなった。
- LiNK事業の開始に先立ち、7月31日に札幌市の後援を得て、さっぽろ青少年女性活動協会。北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センターとともにキックオフシンポを行い、ピッケノハコ利用者の現状を発信した。

【アドヴォカシー】

- 若者支援に関する講座などで、招きに応じ、現状の周知を図った。
- 若年女性支援および社会的養護アフター事業に関する学習、制度の検討と行政への働きかけを行った。
- 講座等で講義を行った。また外部のメディアへの寄稿、マスメディア等への情報提供を行った。

講座：釧路10月10日、市民ネット10月13日、札幌市ボランティア講座11月26日、北海道主催DV講座

原稿依頼：高校生活指導、市民ネットニュース

メディア：NHK、北海道新聞

3、事務局体制

- 法人の会計労務全般・レターの印刷発行・印刷物の作成を行い、事業運営の円滑化に努めた。
- 当面は、各スタッフが事務局作業を分担して行った。
- 2021 年度は6 月以降、休眠口座の助成金を得ることができたため、助成金関係の経理事務処理を行った。
- スタッフの労務管理、随時見学者・取材への対応を行った。

4、LiNK 事業

札幌市の「困難を抱える若年女性支援事業」が8 月からスタートした。事業の受託は公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会であるが、CAN では、事業のうち、居場所提供（シェルター）と自立支援の一部を協会からの再委託の形で受託した。準備段階から DV シェルター、北海道民泊協会、子どもシェルターをはじめとする民間団体や行政機関との連携を進めたほか、実際の支援を通じて、生活困窮者支援や障がい者支援などの団体や、不動産業者等の助力を得るなど、LiNK に携わることによって、支援の幅を広げることができた。また、アウトリーチ事業である、SNS パトロールと繁華街の夜の声掛けについても、協会と協同で事業に携わった。

① 居場所提供

表5 ヒミツノハコ宿泊期間

1 泊	1 名
2 泊	1 名
3 泊	1 名
4 泊	2 名

中間シェルター 訪問	自立支援 会議	自立援助ホーム 入居調整	一般賃貸住宅 入居調整	GH 入居調整	就労・就 学調整	支援 措置	生活保護 申請援助
46 (3)	3	2	3	1	1	1	2

② シェルター利用者への自立支援

表6 実施状況

- CAN のシェルターを出た後、住居等が決まるまで協力機関のシェルターに入居している間は、中間シェルターを訪問して意向や生活状況の確認を行い、訪問が難しい場合には、電話または LINE で様子を尋ねた。
- 正月三が日でピッケノハコが閉室している間も、中間シェルター利用者がいたため、一緒に初もうでに行くなど、スタッフが毎日様子を尋ねた。
- 未成年で本人契約の難しいケースもあったが、不動産業者の協力により、賃貸住宅に入居することができた。居住支援団体との連携が不可欠である。
- CAN のシェルターを出た後、長期的な居場所が決まるまでに時間を要し、中間シェルターでの滞在が長引いた。要因としては、①本人が未成年で賃貸の本人契約が難しいこと。②自立援助ホーム入居が適当と思われても定員に空きがほとんどなかったこと。③初期費用の用意が難しかったことがあげられる。さらに、障がいのグループホーム利用が適当と思われるケースでは、障がいの認定がなく、それまでの受診歴では利用要件が整わなかった。障がい者支援事業所との連携の必要性を痛感した。
- また、中間シェルターの協力機関として民泊協会、子どもシェルターも想定していたが、本人の状況

などから利用が難しく、DV シェルターの若者向けシェルターに利用が偏ってしまった。

- 1 日 2 日程度のごく短期間シェルターを利用し、その後帰宅するといったプチ家出先としての利用はほとんどなく、シェルターを利用される方は家を出たい一心でその後のことにまで想定が及んでいない傾向があった。そのため、ご本人が取りうる選択肢は限られている中で、その選択肢をひとつひとつ検討しながら、自立に向けて計画を立てていくことが求められた。
- 3 名の方について、それぞれ一回ずつ自立支援会議が行われた

表 7 自立後の居住場所（帰宅者を除く）

自立援助ホーム	一般賃貸住宅	グループホーム
1	1	1

③ アウトリーチ活動

表 8 実施回数

SNS パトロール	すすきの夜歩き
31	6

- SNS パトロールではキーワードでの検索や、札幌駅からの一定距離内でのつぶやきを拾う条件検索をかけて、心配なつぶやきをしている人には DM で呼びかけた。
- すすきでは、夜間、すすきの駅を中心に、地下歩行空間、狸小路などを歩き、LiNK の情報カードをマスクや携帯カイロに添付して配布した。また、東京の支援団体 Bond からスタッフを招き、一緒に歩いてもらい、声掛けのスキルなどを学んだ。

以上